

飼養環境を見直して生産性向上 —豚サーコウイルス2型について—

豚サーコウイルスは近年になって注目されるようになったウイルスです。豚サーコウイルス2型はPMWS（離乳後多臓器発育不良症候群）、PDNS（豚皮膚炎腎症症候群）、流死産、肥育豚の呼吸器病の原因と言われており、これらを総称してPCVAD（豚サーコウイルス関連疾病）と呼ばれており、離乳～肥育初期の子豚の損耗に大きく関わっています。このウイルスの特徴はウイルス感染だけでは病気にはならず、他の病原体の複合感染により症状を増悪させます。全国的に多くの農場がこのウイルスの侵入を受けています。

<PMWS（離乳後多臓器発育不良症候群）とは>

好発日齢は30～90日齢で、発育不良・呼吸困難（腹式呼吸）・頻回呼吸・黄疸・下痢・体表リンパ節の腫大などがみられます。発病豚の死亡率は80%以上です。

この症状は豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）に似通っていて、区別は困難です。また、両方のウイルスが同時に感染していることもあります。

<PDNS（豚皮膚炎腎症症候群）とは>

好発日齢は45～120日齢で、後肢や会陰部皮膚に赤紫斑がみられ、発病豚は急性経過で死亡します。

<対策>

別添の飼養衛生管理基準や裏面のマデックの20の原則を遵守し、衛生的な環境で豚を飼育することです。

<マデックの20の原則とは>

1998年にフランスのマデック博士がPMWSに対処する方法として、飼育環境に改善に着目して、裏面の20の原則を守ることを提唱しました。



飛騨家畜保健衛生所

TEL(0577)33-1111 FAX 32-9019 E-mail:c24508@pref.gifu.lg.jp

ご不明な点は、市町村担当者、獣医師もしくは家畜保健衛生所までご相談ください。

－マデックの20の原則－

分娩ステージ

- (1) ロットごとにピット下を洗浄消毒する。
(部屋毎のオールイン・オールアウトの徹底)
- (2) 分娩前に母豚を豚体洗浄する。寄生虫対策を必ず行なう。
- (3) 里子の原則禁止

離乳ステージ

- (4) 1豚房当たりの頭数は13頭以下。ペンの間仕切りは壁にする。(直接接触防止)
- (5) ピット下の洗浄・消毒、オールイン・オールアウト
- (6) 飼育密度は1平方メートル当たり3頭まで(離乳直後)
- (7) エサ箱の広さは子豚1頭当たり7cm以上
- (8) 空気の質の維持(アンモニア濃度10ppm以下、CO2濃度0.15%以下)
- (9) 温度管理の徹底
- (10) ロット間で豚を混ぜない

肥育ステージ

- (11) 1豚房の頭数は出来るだけ少なく、ペンの間仕切りは壁にする。
- (12) ピット下の洗浄・消毒、オールイン・オールアウト
- (13) 離乳豚期の豚房と混飼しない。
- (14) ロット間で豚を混ぜない
- (15) 空気の質の維持(アンモニア濃度10ppm以下、CO2濃度0.15%以下)
- (16) 温度管理の徹底

その他

- (17) 適切なワクチネーションプログラムの立案と実行
- (18) 豚舎内の空気の流れ、豚の流れを大切に
- (19) 厳格な衛生管理(去勢時、注射時等)
- (20) 病豚は出来るだけ早く隔離部屋に移動させる。
(日清丸紅飼料(株)検査センタートピックスNo.70539より)

<参考> 豚の環境要因の各ステージにおける推奨値

	適温	最低温度	湿度
新生子豚 0～3日	34	28	77～90
哺乳子豚 3～14日	28	22	65～80
14～35日	25	20	65～80
子豚 6～9週、9～20Kg	20	15	65～80
肉豚 9～13週、20～45Kg	20	15	65～80
13～18週、45～70Kg	18	10	65～80
18～32週、70～100Kg	15	10	65～80
分娩豚舎			
育成豚 90～115Kg	10～15	10	60～80
妊娠豚 115～135Kg	10～15	5	60～80
種雄豚 135～230Kg	10～15	5	60～80

(倉田修典/戦略養豚ポイント70より)

<予防>

豚サーコウイルス2型ワクチンが、2008年にベーリンガー・インゲルハイム社の子豚ワクチンに続き、メリアル社の母豚ワクチン、インターベットシェリングプラウ社の子豚ワクチンと日本で3社のワクチンが認可されました。生産性向上に貢献する有効な手段のひとつとしてこのワクチンを活用されてはいかがでしょうか？

